

# 支援を組み立てるための基本

# 基礎研修について

基礎研修は、行動上の問題を抱えることで、強度行動障害になりやすい、自閉スペクトラム症のある人の困り感や困難さについて、体験も含めて理解すること、また基本的な障害特性を理解して「支援手順書」に沿って適切な支援ができるようになることを目標としています。



強度行動障害の支援においては、個別支援計画や居宅介護計画といった大まかな支援内容では、適切な支援を行うことができません。障害特性に配慮した留意点を整理し、日々の日課と各活動の詳細を決め、時間単位で各活動をどのような流れで行っていくかを詳細に記した「支援手順書」が必要になります。強度行動障害支援者養成研修の基礎研修のゴールは、①「支援手順書」に記されている内容を正確に理解し、手順通りに遵守できることです。と同時に、②支援内容の概要や必要な利用者の行動を随時記録し、それをまとめて報告することができることの2点になります。

# 基礎研修が目指すもの

① 「支援の手順書」に書かれている内容とその根拠を理解する

② 詳細な手続きまで手順通りにルールを守る

③ 支援内容の概要や利用者の行動を記録し報告する

# 実践研修について

実践研修は、支援現場の経験を踏まえて、支援の内容を自ら組み立て、チーム内に指示を出す人たちを養成することを想定しています。行動上に課題を抱える人たちの支援について、支援の見立てを行い、計画を作成し、チーム内で支援内容を共有していくことができる人は非常に重要です。実践研修では、障害特性についてさらに理解を深め、本人の状態や本人を取り巻く環境のアセスメントを行い、適切な支援方法や環境への配慮を考え、現場の支援者が適切な支援を共通して行うための支援手順書を作成することができるようになることを目指しています。



実践研修のゴールは、サービス管理責任者が作成した個別支援計画を読み込み、詳細な支援手順書を作成し、支援の担当者（基礎研修修了者）にその方法を正確に伝達できることです。日々の支援結果の記録方法についても指示を行い、一定期間の手順で実施した支援結果を取りまとめ、サービス管理責任者と支援の変更や継続について検討することも重要となります。

# 実践研修が目指すもの

① サービス管理責任者が作成した個別支援計画を読み込み、「支援手順書」を作成する

② 「支援手順書」のサービス提供方法について正確に伝達し、日々の支援結果の記録方法についても的確に指示する

③ 一定期間の手順で実施した支援の結果を取りまとめ、サービス管理責任者と相談し、支援方法の変更や継続について議論する

# 講義内容（支援を組み立てるための基本）

① – 支援を組み立てるための基本的な流れ

② – 障害特性と行動についての再確認

# この時間で学ぶこと

I : 支援手順書の意義



II : P D C Aサイクルの流れ



アセスメント→プランニング（支援手順書）→支援の実施→記録（再アセスメント）→再プランニング（支援手順書の修正）

III : チームアプローチの重要性



IV : 支援手順書の役割と支援の統一



V : 障害特性の再確認



VI : 行動の意味を理解する

# I : 「支援手順書」の意義

行動障害が軽減し、落ち着くことで、その場での生活を継続させるために「支援手順書」があるわけではない



行動障害の軽減 = それゴールではない



かかわる支援者が統一した対応を行うことで行動障害が軽減し、地域での生活を実現させるために「支援手順書」がある



# 「支援手順書」の例 | (文字)

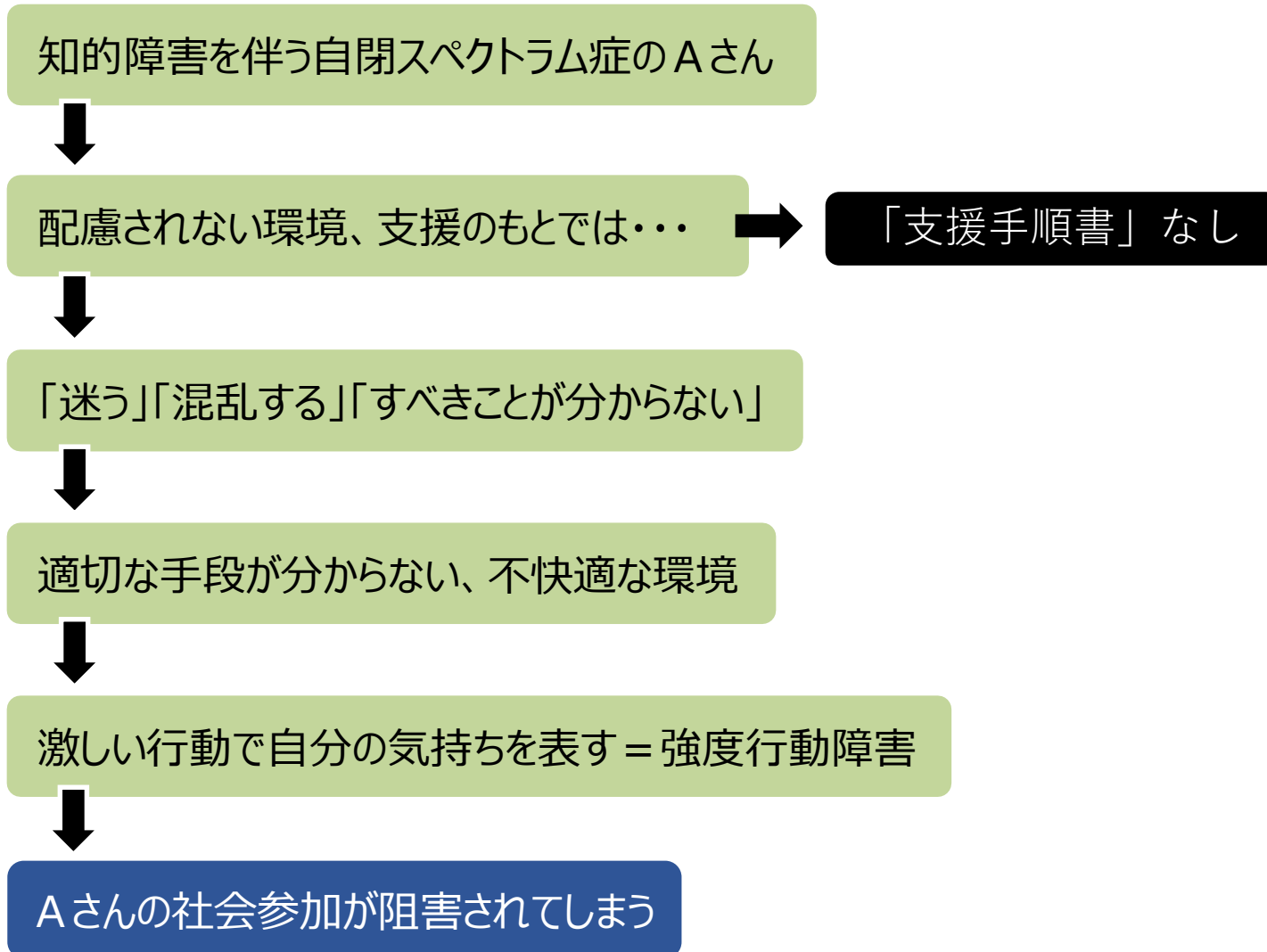
時間	活動	サービス手順
9:30- 10:00	来所	【スケジュール1：朝の準備】 静養室（スケジュール）→静養室（着替え）→静養室（休憩）→アラーム（9:50）→作業室
10:00- 10:45	班別 活動	【スケジュール2：DVD組み立て×2回】 作業室（作業15分）→静養室（休憩10分）→アラーム→トイレ→静養室（スケジュール）→作業室（作業15分）
10:45- 11:00	お茶 休憩	【スケジュール3：お茶休憩】 作業室→静養室（スケジュール）→手洗い→静養室（お茶休憩）→アラーム→作業室
11:00- 11:45	班別 活動	【スケジュール4：DVD組み立て×2回】 作業室（作業15分）→静養室（休憩10分）→アラーム→トイレ→静養室（スケジュール）→作業室（作業15分）→静養室
11:45- 12:45	昼食 昼休み	【スケジュール5：昼食】 静養室（スケジュール）→手洗い→静養室（スケジュール）→食堂（昼食）→静養室（休憩）

## 【連絡事項】

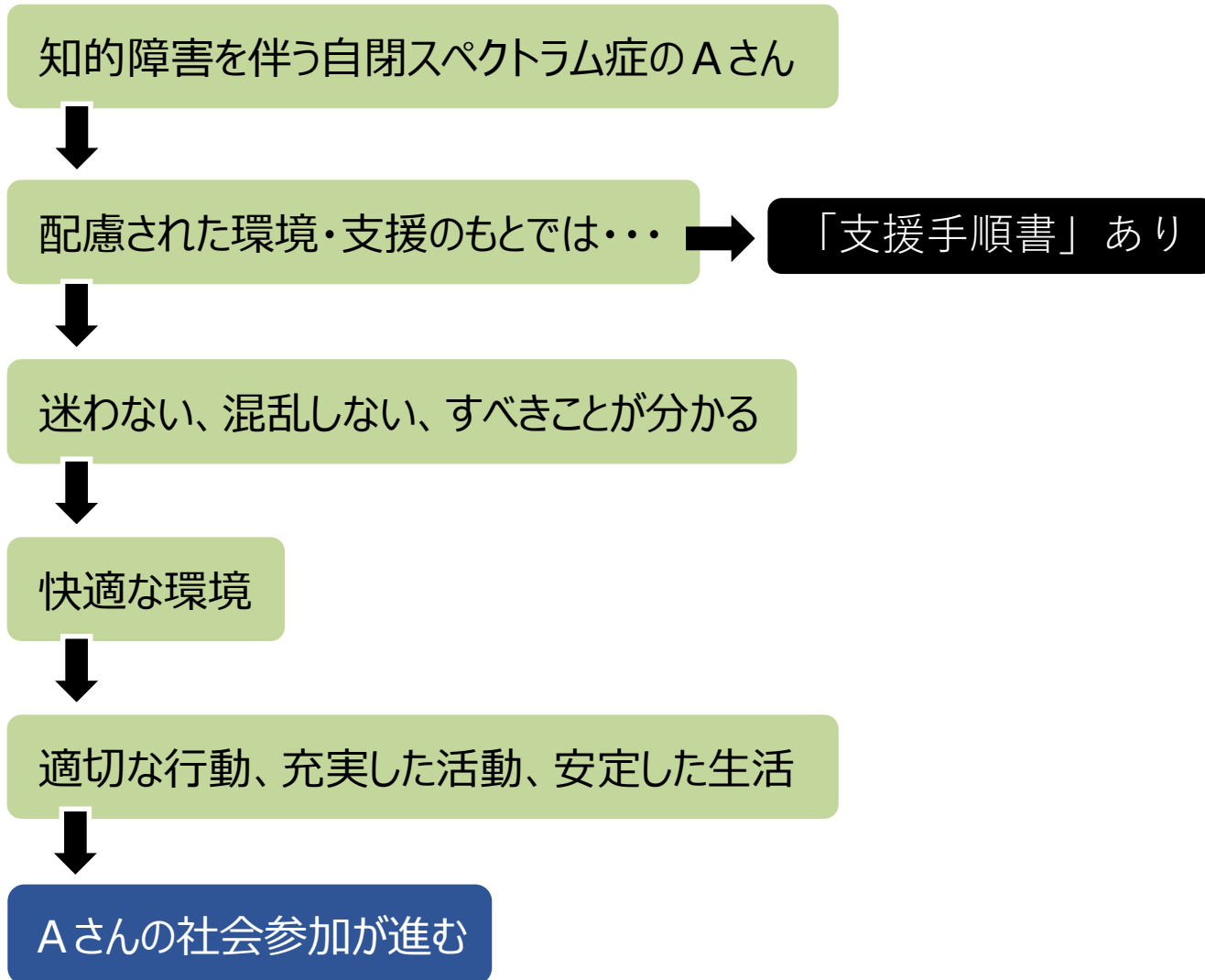
- 活動の切り替えは静養室で行います。原則として活動ごとにスケジュールを確認します。
- 静養室での休憩の終わりはアラームで知らせます。
- ロッカーは静養室に移動しました。着替えは静養室で行ってください。
- 熊谷さんと動線が重ならないように注意してください（特に朝、休憩時間）
- 自立課題終了後、帰りの準備をするまでに20分間の休憩が入ります。

## 【問合せ事項】

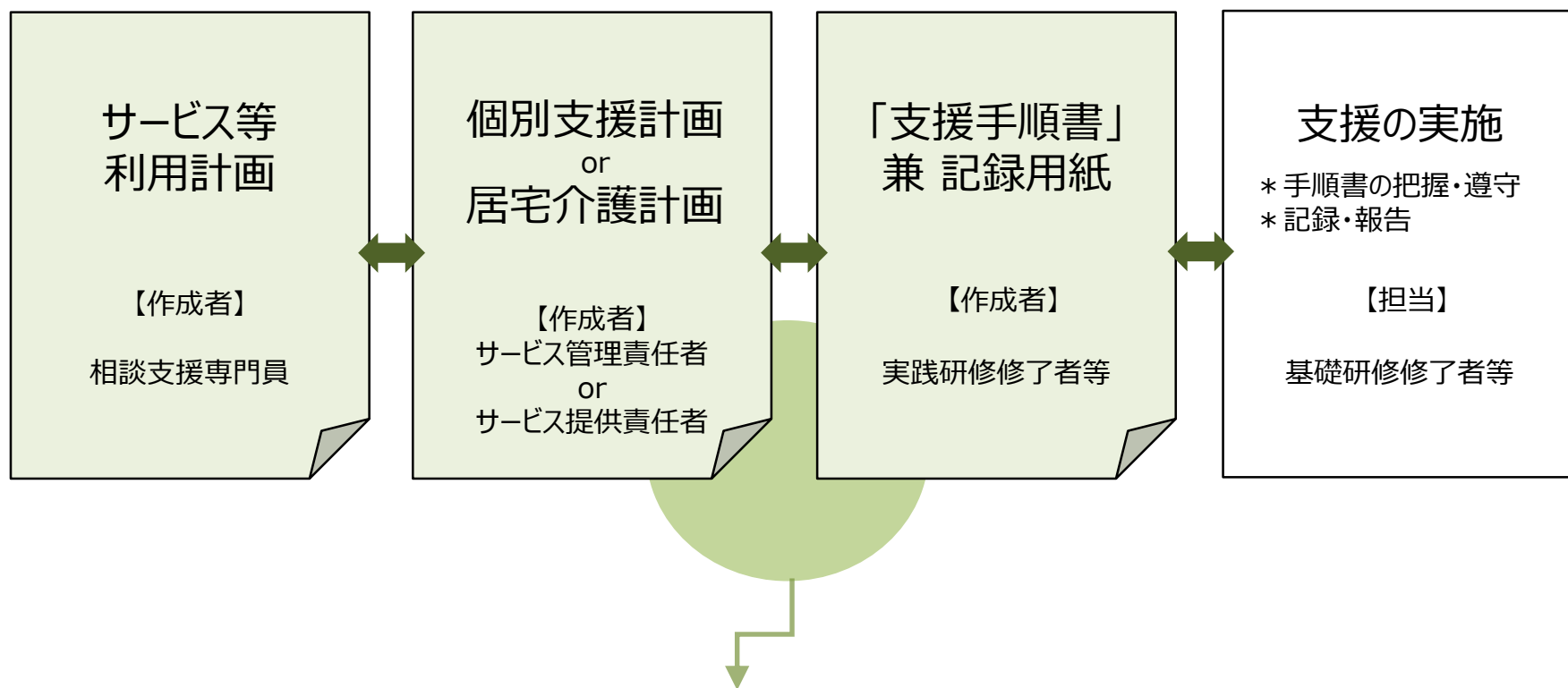
# 「支援手順書」と社会参加の関係 | 「支援手順書なし」



# 支援手順書と社会参加の関係 | 「支援手順書」あり

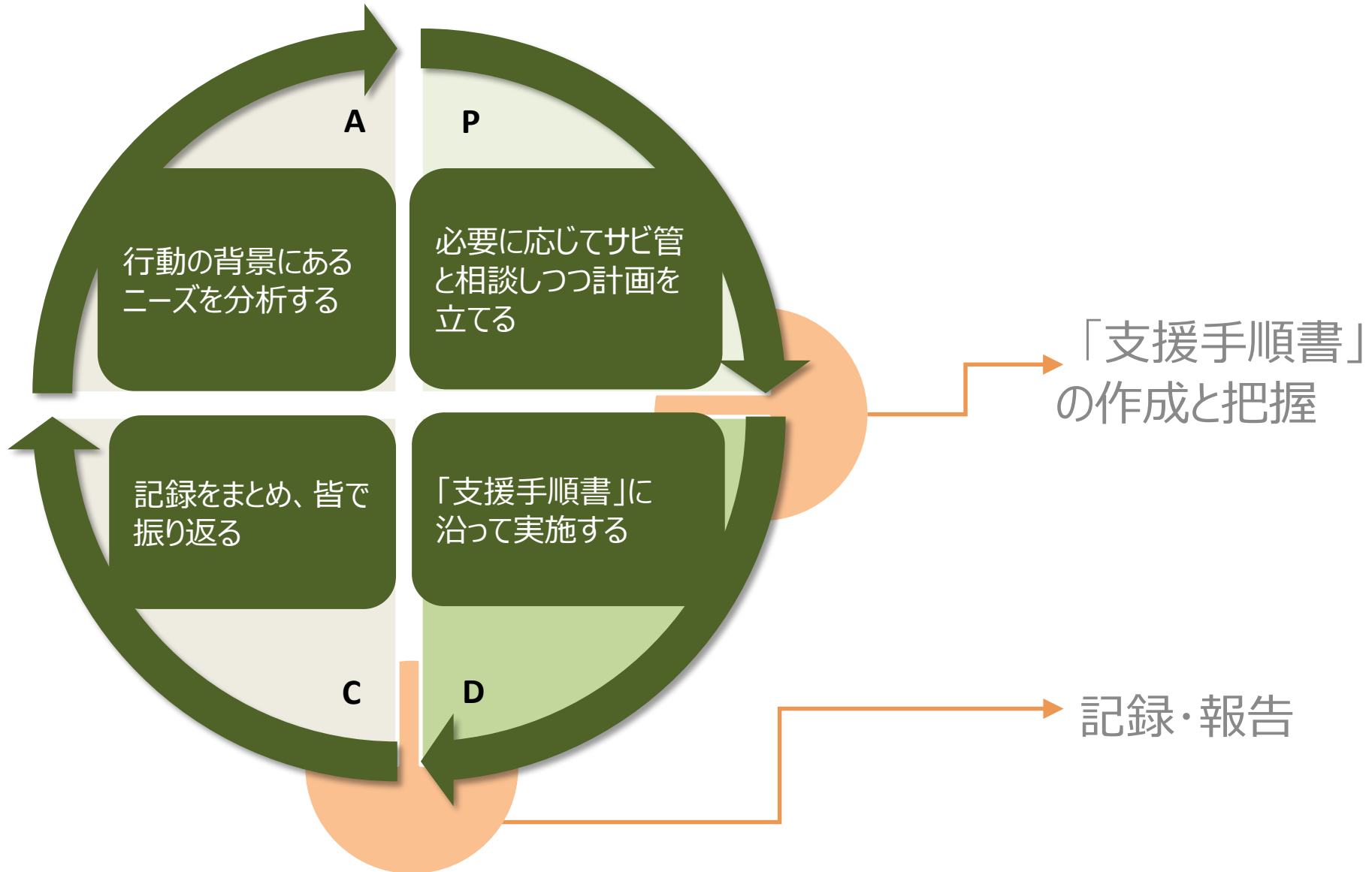


# 個別支援計画と支援手順書の関係

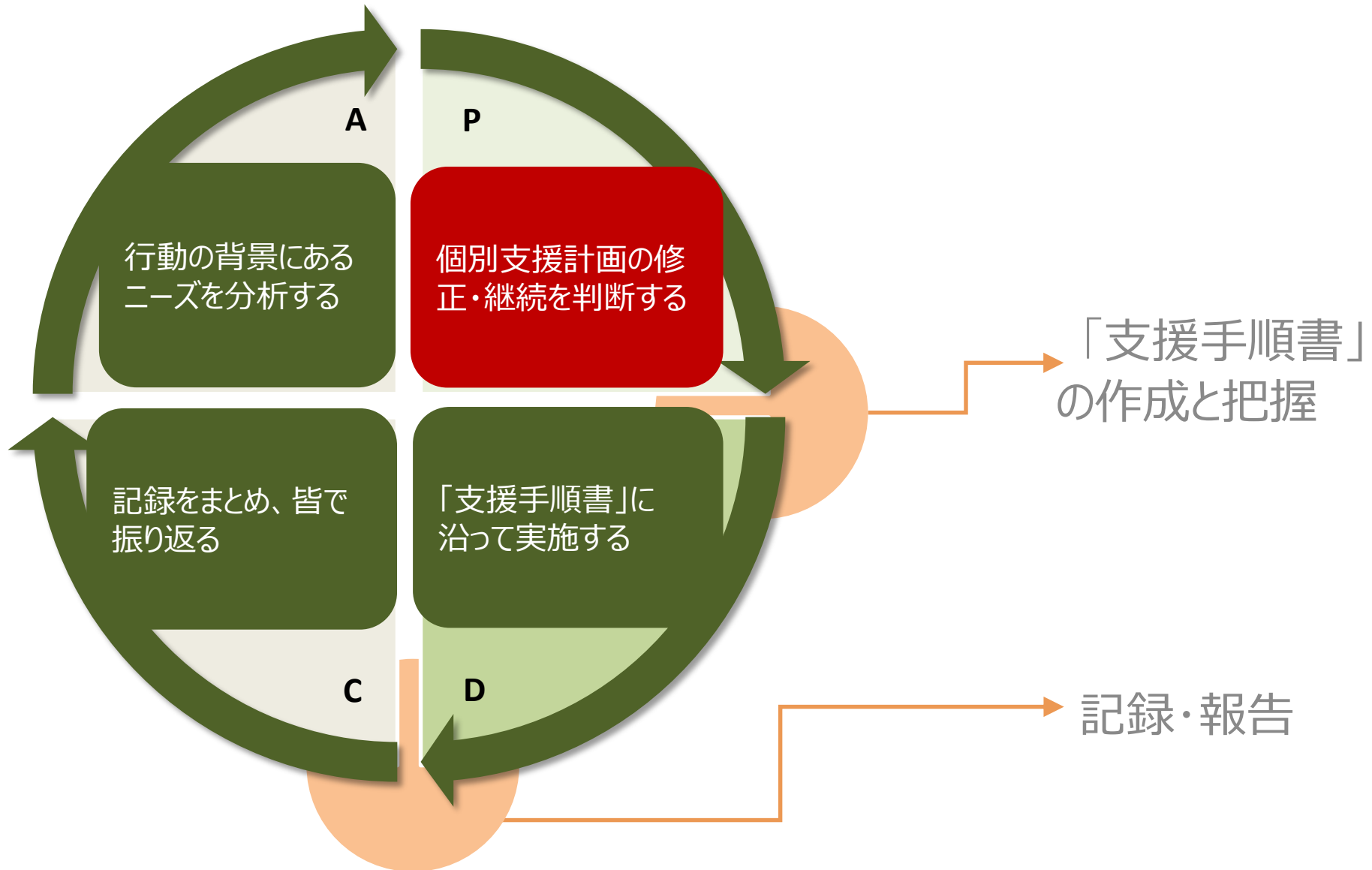


強度行動障害の支援においては、個別支援計画や居宅支援計画といった大まかな支援内容では、適切な支援を行うことが難しい。障害特性に配慮した留意点を整理し、日々の日課や各活動の詳細を決め、時間単位で各活動をどのような流れで行っていくかを詳細に記した「支援手順書」が必要となる。

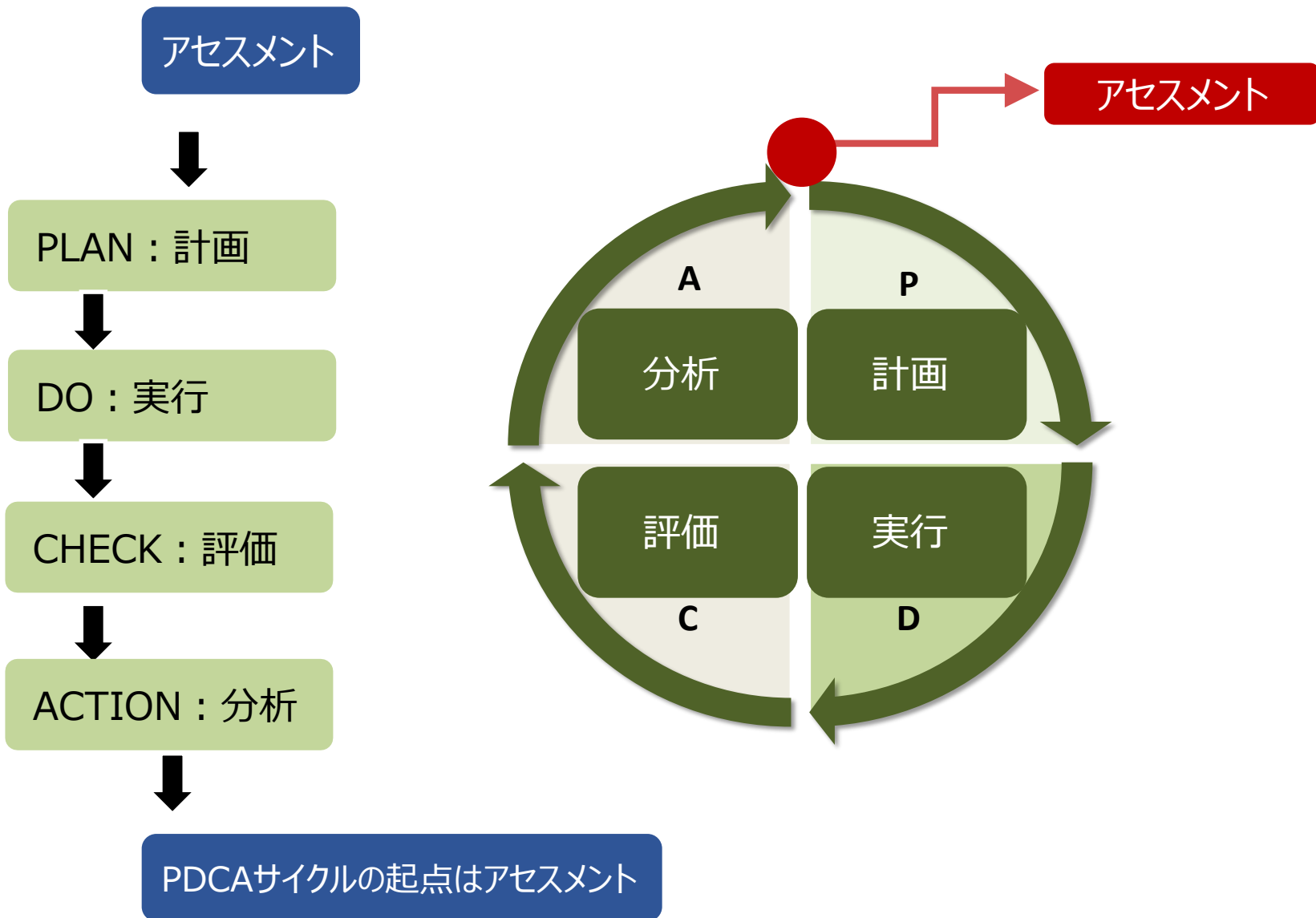
## Ⅱ : P D C Aサイクルの流れ



# P D C Aサイクルの流れ | 2周目以降



# PDCAサイクル | 起点はアセスメント



# アセスメントをする目的 – ①

## 目的① → 支援計画を個別化し、個別支援計画を作成するため

- 医学的な診断（知的障害や自閉スペクトラム症）の次に、その診断名がどのような特性を持っているか、アセスメントしていく必要がある
- どのような特性があるのか、その特性があることによって、発達上や行動上の問題にどういふことがあるのか、一人ひとりについて知っていく必要がある
- 障害特性の理解に基づいたアセスメントが必要  
→ 障害特性についてよく理解していなければ、アセスメントはできない
- 支援計画を個別化していくためには、一人ひとりの違いを見定めることが必要



# アセスメントをする目的 – ②

## 目的② → アセスメントの結果を共有し、チームで取り組むため

- チームで取り組むためにも、アセスメント結果の共有が必要
- 自閉スペクトラム症の人の支援で特に大切なことは、統一した支援を提供することが大切
- そのためには、チームで仕事をする時に、バラバラなやり方にならないように配慮しなければならない→そのためにアセスメントがある
- その人の苦手さに対し、こういう苦手さを持っているため、何をどのように支援すべきか決まった形で示すことができれば(支援手順書)、共有して支援を提供することができる
- アセスメントをしないと、人の見方によって、対応が変わっていくということが起こってしまう

# アセスメントをする目的 – ③

## 目的③ → 支援の目標や提供するサービスを決めるため

- その人にとって必要なことを個別化する
- 「支援手順書」は、一人の思いやその場の思いつきではなく、客観性のある資料に基づいて作成される必要がある
- 提供した支援の効果を検証する  
→ 「支援手順書」の根拠やその方法には妥当性があったのか（客観的な視点、合理的な視点）
- エビデンスの重要性

# アセスメントをする目的 – ④

## 目的④ → 適切な支援を提供するため

- エビデンスに基づかない的外れな支援を一生懸命やっていて、「これだけ頑張っているんだから」と言い訳をするのはもう昔のはなし
- 適切な支援を、適切なタイミングで、適切な量を提供できるように心がけていくためには、アセスメントが必要でありかつ重要である

# P D C A サイクル

- PLAN→アセスメント情報に基づき、一人ひとりの違いを見定め、根拠（エビデンス）に基づいた客観性ある支援の計画を作成する
  - DO→計画したことを実施する（適切なアセスメントを踏まえて実施）
    - 計画を意識して支援する
    - 支援記録を残す（再評価＝再アセスメントをするために）
  - CHECK→支援計画実施後の結果を評価する
    - 記録に基づいて、客観的に評価する
  - ACTION→評価に基づいて分析する
    - 次の支援計画を立案する
- ◇ P D C A サイクルをグルグルと回して支援計画の最善を目指していく

# Ⅲ：チームアプローチの重要性

- チームで仕事をする時に「支援の手順」を作成することで、混乱がないように同じ伝え方をすることができる
- チームで仕事をする時は、関わりをなるべく変化させないことが大切
- 変化の適応が苦手、抽象的概念の取り扱いが苦手というように言われている自閉スペクトラム症の方は、支援者が提供する支援の微妙なズレでも混乱することを考慮する
- ある人の支援と、違う人の支援は微妙に異なるということで、利用者は確実に混乱してしまう
- そのようなことを防ぐためにも、アセスメントを行うことで、支援する側が「支援手順書」を整理し、統一した支援を提供することが大切

## IV : 「支援手順書」の役割と支援の統一

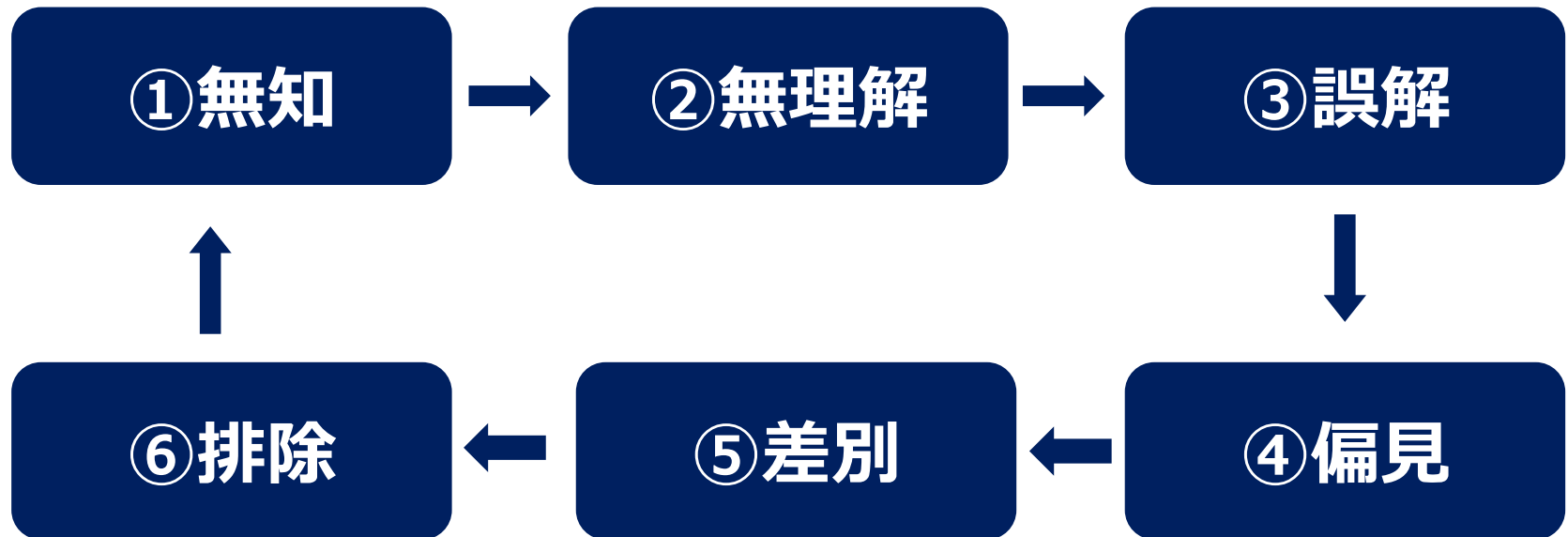
- 個別支援計画といった大まかな支援内容では、支援計画を行うことは難しい
- 障害特性に配慮した留意点を整理し、日々の日課や各活動の詳細を決め、時間単位で各活動をどのような流れで詳細に行っていくかを詳細に記した「支援手順書」が必要となる
- 「支援手順書」は客観性のある資料に基づいて提供される必要がある
- 支援手順書の根拠やその方法には妥当性があったのか（客観的な視点、合理的な視点について根拠はあったのか、） →エビデンスが求められる
- チームで仕事をする時に、「支援の手順」を作成することで、混乱がないように同じ伝え方をすることができる  
→「支援手順書」を遵守する

# V : 障害特性の再確認

障害特性を知らないとななるのか



知らない、●●しちゃう



負の連鎖は何故生じるのか？

# 冰山モデル

課題となっている行動  
**強度行動障害**

かんしゃく、奇声、他害、自傷、パニック  
不適切な行動、つよいこだわり・・・など

(本人の特性)

社会性

コミュニ  
ケーション

想像力

感覚

認知・記憶

注意・集中

運動・姿勢

(環境・状況)

強度行動障害は  
特性と環境のミス  
マッチから生じる

水面下の要因に着目する

必要なサポート

本人の障害特性に  
合わせたサポート  
を考える



# なぜ、特性を理解する必要があるのか①

● 障害特性は、「強み」と「弱み」に言い換えることもできます。「強み」は支援に活かすものであり、「弱み」は支援者が歩み寄るところと言えます。よって障害特性の把握においては、「強み」と「弱み」の両面を整理しておくことが重要です。

「強み」→ 支援に活かすもの

「弱み」→ 支援者が歩み寄るところ

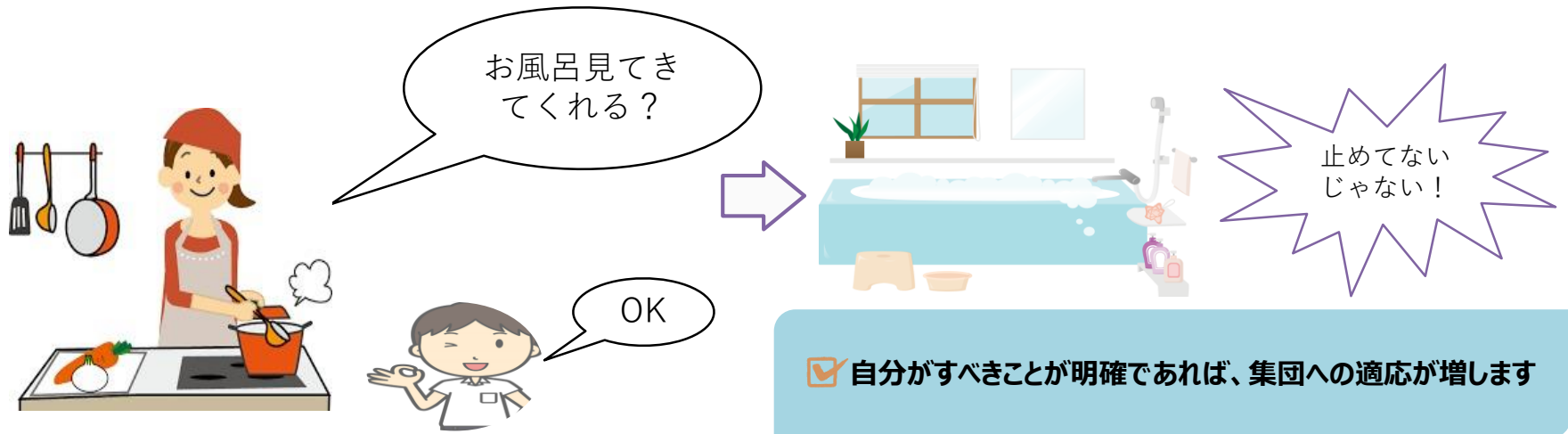
● 自閉スペクトラム症の方々は、少数派です。特にその学習スタイルは、多数派と大きく異なります。障害特性を整理し把握することで、どのような学習スタイルを持っているのか把握し、整理することができます。

## なぜ、特性を理解する必要があるのか②

- 自閉スペクトラム症の人たちの学習スタイルに合わせた支援を展開することで、適切に学ぶことができ、強度行動障害という状況に陥ることなく、より良い生活を送ることが出来ます。
- ですから、私たちは自閉スペクトラム症の人たちの特性を常に学び、支援の基盤に置く必要があるのです。
- 配慮すべき点をしっかりと押さえ、「強み」を整理することがポイントになります。

# 視点①：社会性の特性

- ◇対人関係を持つことや、維持することが苦手
  - 関心の乏しさや激しさ、一方通行
- ◇集団の中での振る舞いに関する苦手さ
  - 集団での立ち位置、人混みの苦手さ、集団意識の把握
- ◇年齢相応の常識を捉えることが苦手
  - 空気が読めない、善悪の判断や危険に関する認識が苦手
  - 教えられなくても自然に身につく社会の了解事項
  - 言葉をそのままに受け取ってしまう

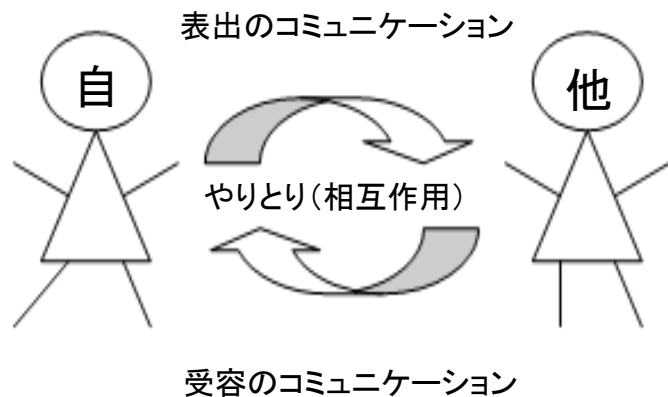


## 視点②：コミュニケーションの特性

- ◇発信と理解のアンバランス
- ◇特定の他者にメッセージを伝えたり、他者が伝えているメッセージを解釈したりする行為が苦手

→「伝え合う」という人と人のやりとり = 相互作用が苦手

- ◇話の全体のニュアンスを理解することが苦手
- ◇言葉以外の意味を把握することが苦手
- ◇非言語コミュニケーションの苦手さ（表情や視線）

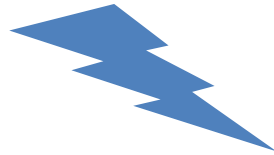


自閉症の人から見たコミュニケーション

☑ コミュニケーションは話し言葉だけではなく、目に見えるツールを活用することで、伝達度が増します

## 視点③：想像力の特徴

- ◇「目の前に存在しないものを取り扱うことが」＝「想像力」が苦手
- ◇漠然とした見通し、急な予定変更、新規場面が苦手
- ◇結果として、決め事や興味・関心が偏ってしまう
  - けれど、それがとても好きなこともある
- ◇段取りを適切に組んだり、優先順位をつけることが苦手
- ◇何となく、だいたいも、苦手



- ☑ **目の前に存在する視覚的な情報があると、分かりやすさが増します**
- ☑ **興味関心の対象への思いが、強みになることも多くあります**

# 視点④：感覚の特性

## 感覚過敏と感覚鈍麻

- ◇聴覚刺激に対する反応
- ◇視覚刺激に対する反応
- ◇触覚刺激（皮膚、温度）に対する反応
- ◇臭覚刺激に対する反応
- ◇味覚刺激に対する反応
- ◇その他、前庭覚刺激（揺れなど）に対する反応等

## 感覚の種類

### 外界の情報を捉える感覚



視覚



聴覚



嗅覚



味覚



触覚

### 自分の体の内部からの情報となる感覚



触覚



固有受容覚

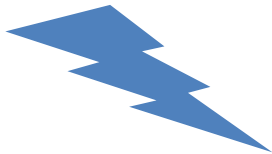


前庭覚

- ☑ 感覚に関する反応が、心身の状況や調子のバロメーターとなることも多くあります
- ☑ 感覚障害の対応には様々な工夫が求められます

## 視点⑤：認知・記憶の特性

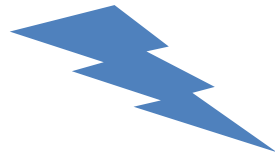
- ◇複数の情報を同時に処理することが苦手
  - 同時に2つ以上のことをすることが苦手
- ◇学習に関する不均衡（文字・数・マッチング）
- ◇その人独自の理解の仕方がある
- ◇物事の関係性を捉えたり、時系列など整理したりすることが苦手
- ◇フラッシュバック（消えない記憶）
- ◇長期記憶やワーキングメモリー（今やっていることの記憶）などの強さと弱さのアンバランスさがある



- ☑ **ひとつずつの情報や課題を処理することは得意です**
- ☑ **視覚的な情報に強みを持っています**
- ☑ **視覚的に際立った記憶力を有していることもあります**

## 視点⑥：注意・集中の特性

- ◇他者と感じ方を共有したり共感することが苦手
- ◇注意を持続することに偏りがある
- ◇注意を向ける範囲に偏りがある
  - 狭く深い
  - 注意を別な方向に向けることが困難
- ◇視野自体の狭さ、見る方向の独特さ
- ◇視野の狭さや見る方向の独特さがある

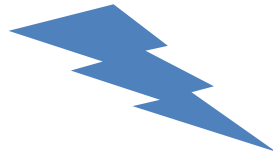


- ☑ 人とは異なる着眼点を持っていることがあります
- ☑ 見るべきところや、終わりが明確に示されたら、注意を向けやすくなります



## 視点⑦：運動・姿勢の特性

- ◇ 手指機能の不器用さを示す人もいる
- ◇ 身体の使い方のアンバランスさがある人もいる
- ◇ 姿勢の維持が難しい人もいる
- ◇ 発汗がうまくいかず、体温調整が難しい人もいる



- ☑ 手工芸等の制作活動に長けている人もいます
- ☑ 様々な対応を考えることが重要です

# VI：行動の意味を理解する

(例) 他者を叩いてしまうAさん



Aさんを、個人因子だけみれば…

- ・乱暴な人
- ・かっとなりやすい人
- ・対人関係の困難さを持つ人

Aさんを、環境因子とのかかわりの中でみると…

- ・遊びたいおもちゃを友達が使っているときに叩いている
- ⇒「貸して」と発言するなどの適切な表出コミュニケーションが**未学習**、**誤学習**の可能性はある

# 学習とは

○ 行動のほとんどは、私たちが生まれて以来積み重ねられた経験の中で獲得されています。経験によって身につけた行動を、いつ、どこで、どのように実行すれば良いかも経験によって学んでいるのです。このように、経験によって何かを学び、それまでできなかった行動ができるようになったり、行動の仕方を変えたりすることを学習と呼ぶ。

→ 勉強という意味ではない。勉強も学習の1つであるが、知識や技術に限らず、あらゆる行動が経験によって学ばれるシステム全体を「学習」と呼ぶ。

# 行動は学習の結果

強度行動障害といわれる行動のほとんどは、環境とのかかわりの中で学習された行動と言われる。

# 行動は学習の結果：未学習

## 『未学習』



幼少期や学齡期において、適切な行動を身につける力があるにもかかわらず、周囲の無理解や不適切なかかわりによって身につけることができないままに育ってしまうこと。

未学習であるために、その場に相応しい行動が取れなかったり、自分の希望や気持ちを適切な方法で周囲に伝えることができない。

# 行動は学習の結果：未学習から誤学習へ

## 『誤学習』

未学習のまましていると、本人は何とか自分の希望や気持ちを伝えようとして自分なりの行動を取る。

その行動が他害や物壊しのようなかたちで現れると、周囲はその行動を止めようと無理やり制止したり、逆に本人の希望することを何でも認めてしまう。

すると、本人はますます激しい行動で自分の希望や気持ちを表したり、どのようなときもそのような行動で自分の希望や気持ちを表すようになってしまう。（＝強度行動障害）

# 行動は学習の結果によるもの

強度行動障害が現れている人たちの中に、一定の割合で自閉スペクトラム症の人たちがいる。

自閉スペクトラム症の人たち・子どもたちは学べないのではない。

学ぶ力は持っているが、本人に分かりやすく学ぶ機会が少ない。

本人に分かりやすい学びかた（学習スタイルとも言う）に合わせて、適切な行動を学んでいくことが大切。

# 環境とのかかわりの中で行動を捉える

発達障害のある人は様々な行動を示し、一般の人があまり示さないような行動（常同行動やこだわりなど）や困った行動（自傷、他害、自己刺激行動など）がみられることがある



大衆の中でくるくる回り続ける



水道の水で遊ぶ



食べられないものを口にする



人を叩く



大声を出す



物を投げる



人を押す

課題となる行動のほとんどは、  
環境とのかかわりの中で**学習**された行動



適切な**行動**を学んでいくことで改善していくことが可能



# 行動の機能（目的）を分析する

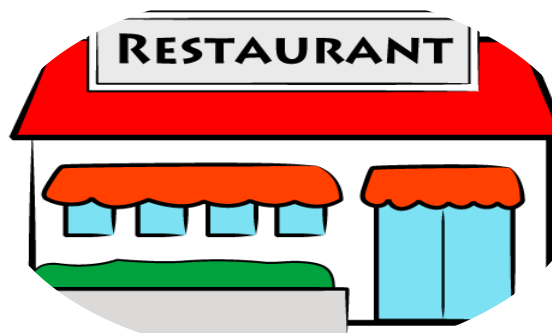
ABC分析（機能分析）は、応用行動分析（ABA ; Applied Behavior Analysis）という科学的方法論に基づいている。ある行動について、そのきっかけとなる「A:行動の前の刺激や出来事（Antecedents）」「B : 行動（Behavior）」「C:行動の結果（Consequences）」の3つの要素から考え、その行動の機能(目的)を分析するという方法。

## 【ABC分析】



この後、のぞみレストランに行くようになる？ 行かない？

## ABC分析



Antecedent  
(きっかけ)

お腹が空いた



Behavior  
(行動)

のぞみレストラ  
ンに行く

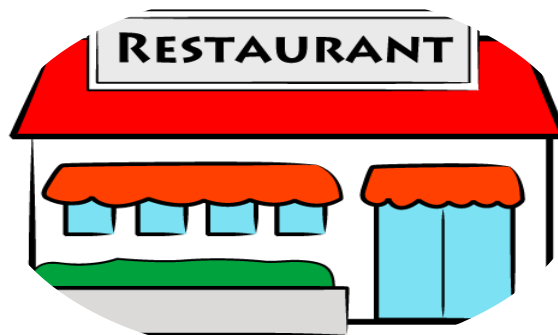


Consequence  
(行動の結果)

サービスが良く  
料理もおいしか  
った

この後、のぞみレストランに行くようになる？ 行かない？

## ABC分析



Antecedent  
(きっかけ)

お腹が空いた



Behavior  
(行動)

のぞみレストラ  
ンに行く

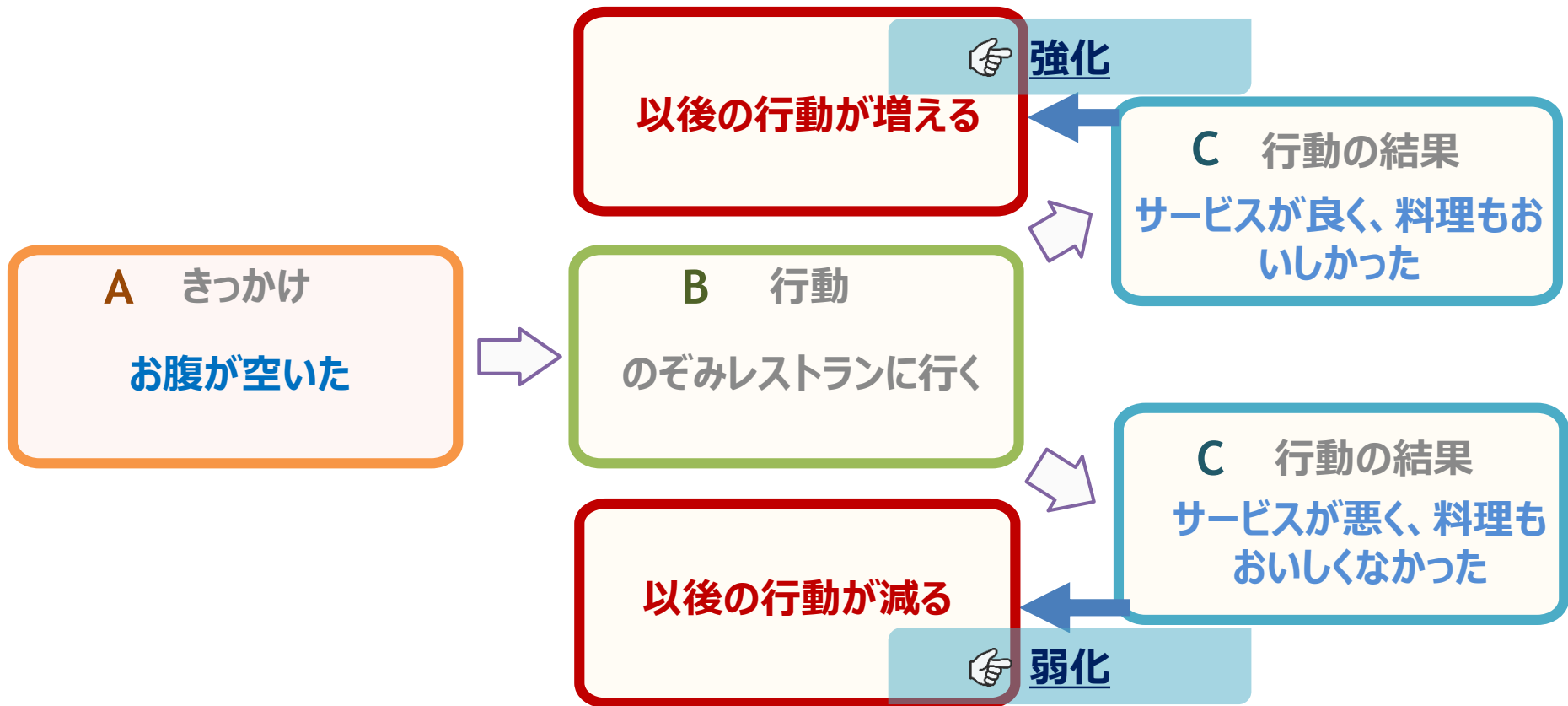


Consequence  
(行動の結果)

サービスが悪く  
料理もおいしく  
なかった

# 行動の増加と行動の減少（強化と弱化）

## 👉 行動の法則を理解する



# なぜ、その行動を起こすのか？①

**課題となっている行動の裏には、コミュニケーションとしてのメッセージが隠れている**

強度行動障害のある方への支援を行う中では、時には課題となる行動に対して戸惑いを感じる 경우가多くあります。私たち支援員からすれば、怪我のリスクもある、「困った人」というイメージを抱きやすい状態です。

しかし、強度行動障害のある方の課題となっている行動には、裏にコミュニケーションとしてのメッセージが隠されていることが多くあります。強度行動障害のある方は、その障害特性とこれまで歩んできた環境と合わさって、本人独特の表現方法（課題となっている行動）に頼らざるを得ない状況にいます。そういった視点で見れば、実は「困っている人」だということが見えてきます。

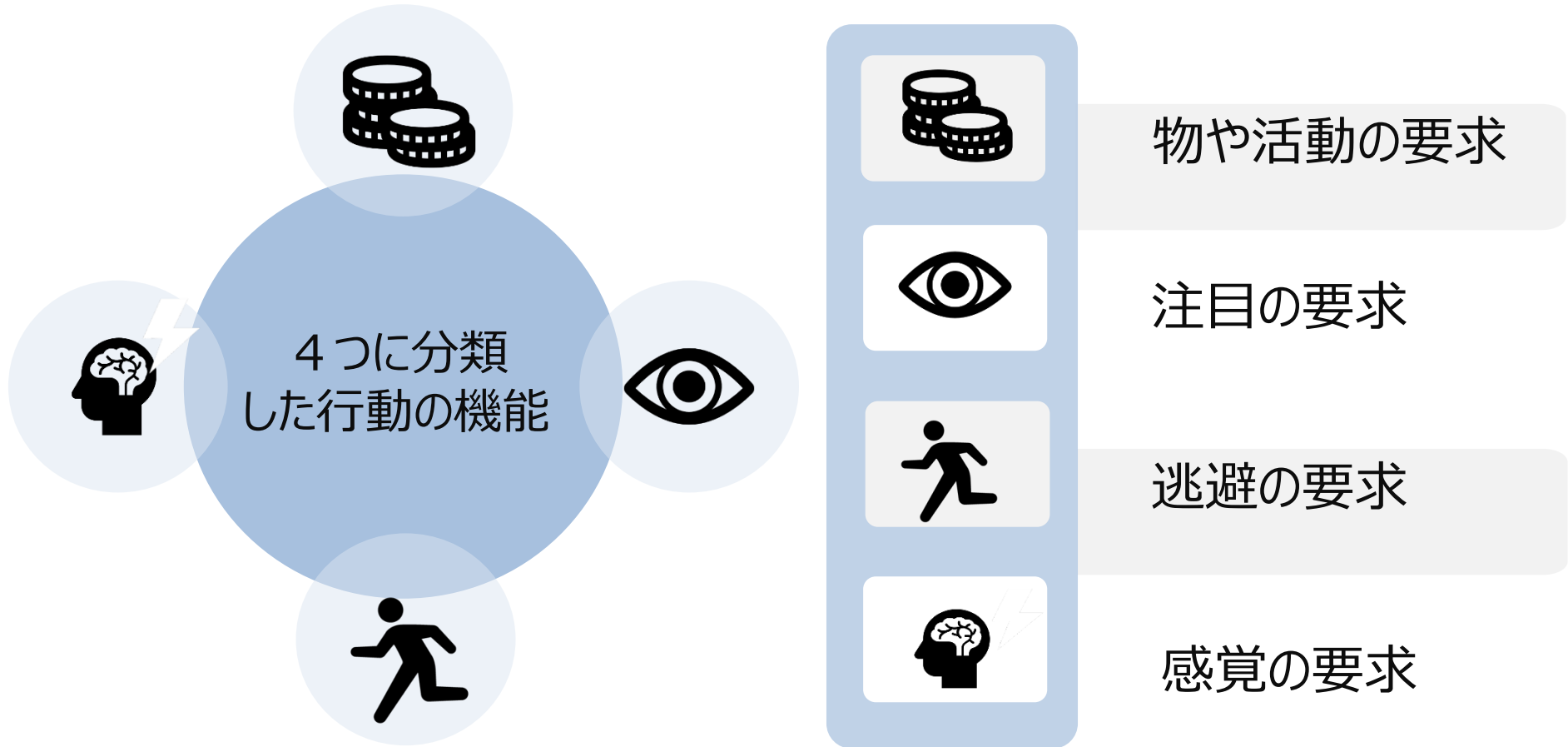
## なぜ、その行動を起こすのか？②

**課題となる行動には4つの機能があり、4つのどれかによって強化されている**

応用行動分析学では、行動には4つの機能があるとしています。強度行動障害のある方は、それぞれの表現方法により、4つの機能を人に伝えようとしています。

- (1)物や活動の要求（欲しい物を手に入れる）
- (2)注目の要求（自分に人の視線を集める）
- (3)逃避の要求（NOという意思表示）
- (4)感覚刺激の要求（その行動自体が、本人にとって、心地よい刺激となっている）

# 4つに分類した行動の機能





# 物や活動の要求

## 物や活動の要求の機能

(Case 1) 三子さんはお菓子が大好きです。ある日、父がスーパーマーケットに買い物に連れて行き、「昨日お菓子を買ったから、今日は買わないよ。」と言ったとたん、店中に聞こえるくらい大声で泣き、床に寝そべて手足をバタバタさせ暴れ出しました。他のお客さんの迷惑になると思い、「1つだけね。」という、すぐに泣き止みお菓子を手に取りました。

### A きっかけ



父と買い物中、  
お菓子は買わないといわれる

### B 行動



子どもが大声でわめきちらす

### C 行動の結果



お菓子を買ってもらえる



# 👁️ 注目の要求

## 注意獲得の機能

(Case 2) 次郎くんは、お母さんが食事の準備を始めると、大きな音がするほど自分の頭を叩く自傷行動をしてしまいます。お母さんは、大きな音と奇声に驚き駆け寄って、次郎くんに声を掛けます。次郎くんは声を掛けられ関わってもらえると、自傷行動をやめることができますが、お母さんがいなくなるとまた始めてしまいます。

### A きっかけ



母が食事の準備をしている  
(母の注目なし)

### B 行動



子どもが頭を強く叩く

### C 行動の結果



母が駆け寄ってきて  
話しかける  
(母の注目あり)



# 逃避の要求

## 回避・逃避の機能

(Case 3) 四郎くんは注射が大嫌いです。医師が注射を取り出すと、奇声をあげ、暴れ始めます。職員数名で手足を抑えても、暴れ続け、注射が出来る状況ではない為、延期となりました。

### A きっかけ



医師が注射を取り出す  
(嫌な活動あり)

### B 行動



子どもが大声で  
わめき暴れる

### C 行動の結果



注射が中止になる  
(嫌な活動なし)



# 感覚刺激の要求

## 自己刺激の機能

(Case 4) 太郎くんは、することがないときや長時間一人にいるときに自分の髪の毛を抜く自傷行為をし続けてしまいます。しかし、本人の好きなテレビを見ている時やおやつを食べている時は、一人でいても自傷行為をしてしまうことはありません。

### A きっかけ



することがない状況  
(感覚刺激なし)

### B 行動



髪の毛を抜く

### C 行動の結果



感覚を得られる  
(感覚刺激あり)

## なぜ、その行動を起こすのか？③

**行動の機能を見ることで、声なき声に気づき、支援に繋げることができる**

行動の機能を見る視点を入れることで、課題となる行動を持つ人たちの「声なき声」に気づき、彼らが何を伝えたいのかを、冷静に見ることができます。困りごとを理解し、支援に繋げることができるのです。

# 行動の機能を推定して支援計画に結びつける

## 行動問題の機能を推定するフローチャート

